# INVITATION

Ehime University Hospital ［愛媛大学医学部附属病院広報誌］

VOL 21

2010

◉特集 **最先端設備を備えた3号館完成**

患者から学び、患者に還元する病院

愛媛大学医学部附属病院

## 治験の推進、新薬や医療機器の開発を行い、医療の発展に寄与する

臨床研究倫理審査委員長 臨床薬理センター長 教授 野元正弘 医師

**PROFILE**
のもとまさひろ◎1986年～88年は環境庁国立水俣病研究センター医長。90年から、鹿児島大学医学部准教授。2001年から同職。専門領域は病態治療内科（薬物療法・神経内科）。趣味は山登り、今年はアルプスに挑戦する予定。

今年4月、本院3号館の1階に「臨床薬理センター（Phase Ⅰ Unit）」が新設されました。臨床薬理センターは、旧創薬・育薬センターにて実施していた事業を引き継ぎ、医薬品と医療機器の開発を促進するための支援を行います。具体的には、臨床薬理試験専用病棟において患者さんや治験ボランティアの方々へ新薬を投与し、薬の効果や副作用を調べます。臨床薬理試験専用病棟の設置は、国内の国立大学病院では初めての試みです。

日本には、臨床試験が実施できていないため厚生労働省の認可を受けていない医薬品が数多くあり、治験の推進は日本が取り組むべき課題となっています。認可の遅れは治療の遅れに繋がり、結果的に患者さんの不利益となってしまいます。また、今日において、新薬・医療機器の開発は国を支える産業へと成長することを期待されています。良い薬・医療機器というものは、医療機関と企業がともに開発に取り組まなければ、生み出せません。医療機関と企業の協力が必要不可なのです。こうした現状をふまえ、臨床薬理センターでは治験を推進すると共に、大学発の研究から、より良い医薬品や医療機器の開発を目指します。

治験の推進には、ボランティアの方々や患者さんの協力が不可欠です。患者さんにとっては、新薬をいち早く治療に使えるというメリットもあります。治験に参加して頂く際には、治験コーディネーターによる支援や説明会・勉強会を開催するなど、治験ボランティアの方々をサポートするための体制を整えています。医療発展のために、ぜひご協力をお願いします。



## 最先端の抗加齢ドック・人間ドックを提供し、受診者の健康を支える

抗加齢・予防医療センター長 小原克彦 医師

**PROFILE**
こはらかつひこ◎1982年大阪大学医学部卒業。1992年より当院に勤務。2010年から現職。専門領域は、老年医学。趣味はジョギング。

抗加齢センターの事業を引き継ぎ、4月、本院3号館に「抗加齢・予防医療センター」が新たに開設されました。当センターでは、最先端の抗加齢ドック・人間ドックを受診者の方々に提供します。3号館に移動したことで、施設の環境が整備され、今まで以上に快適にドックを受診して頂けるようになりました。抗加齢ドックは、動脈硬化や認知障害など高齢化に伴う疾患に特化した人間ドックです。血液検査やMRI、CTのほか、通常の人間ドックでは行わない認知機能や脳血管年齢の評価なども行います。異常をいち早く発見し、予防や治療をお手伝いするだけではなく、ドックの結果をもとに個人にあわせた健康長寿の方法をご提案します。抗加齢ドックを基本コースとして、皮膚ドック・聴力ドック・口腔ドックをオプションとして受診して頂けるようになっています。抗加齢ドックは受診者の負担を少なくするため、検査料金をかなり低目に設定（基本コースで45,000円）しています。これだけの検査項目があるドックとしては破格の料金です。多くの方に受診して頂きたいと思います。人間ドックは、現在、大学職員を対象に試験運用を行っています。2011年春頃には、一般の方にも受診して頂けるようになる予定です。人間ドックでは、基本健診に加えて、レディース検診や眼科検診、PET（がん検診）などのコースを準備し、個人のニーズにあった「個別化されたドック」を提供していく予定です。

今後も受診者に満足頂き、リピーターとして再受診して頂けるような関係を作り上げて、受診者の健康を支えていきたいと思います。新しくなったセンターで、皆様の受診をお待ちしています。

## 愛媛県の小児外科の基幹病院として、小児外科医療の発展を目指す

小児総合医療センター長　亀岡一裕 医師

今年5月に、当院3号館2階に「小児総合医療センター」がオープンしました。当センターでは、主に小児外科、小児心臓外科、形成外科などの患児を対象に、手術の術前・術後の管理や、緊急入院が必要な子ども達の治療を行っています。入院対象年齢は、原則として6歳頃までの乳幼児となっています。

元々、当院には小児の外科系専門病棟がなく、また、乳幼児の外科に特化した看護体制も整備されていませんでした。大人の患者に混じって入院生活を送ることは、子どもとその保護者にとってはストレスとなる場合もあり、また、看護をする上でも様々な問題がありました。その点、当センターは乳幼児の専用病棟ですので、入院する子どもや保護者には、環境面や精神面からも落ち着いた入院生活を送って頂けるようになったと思います。また、看護体制も改善され、小児の特殊性に対する専門的な知識や技術などをもち、きめ細やかな看護を提供することができるようになりました。また、診療においては、愛媛県内でもトップクラスの小児の外科系医師と小児科医が、誇りと情熱をもって担当します。医師には、診療だけでなく、後進の医師の教育・育成にも携わってもらい、高いレベルでの小児の外科医療が継続して提供できる体制をとっていきます。

当センターは、小児の特性について十分に配慮された病棟であり、医師、看護師、その他のスタッフ全員が総力を挙げて、愛媛県における小児外科の基幹病院として、小児外科医療をさらに発展させていくための基盤づくりにも貢献していきたいと思います。

**PROFILE**

かめおかかずひろ◎1979年徳島大学医学部医学科卒業、医学博士。徳島大学医学部附属病院、国立小児病院、愛媛県立中央病院（小児外科医監部長）の後、2008年から当院に勤務。「趣味は仕事かも?」と答えるほど多忙を極める。

新教授就任

## 常にチャレンジし、日本の膝関節外科をリードする組織に

運動器学 教授　三浦裕正 医師

平成22年4月から、愛媛大学運動器学（整形外科）教室を担当することになりました。

運動器とは骨、関節、筋肉、靱帯、神経などからだを動かすために必要な組織や器官の総称で、運動器学は骨折、靭帯損傷などの外傷、関節痛の原因となる変形性関節症や関節リウマチ、腰痛や手足のしびれの原因となる変形性脊椎症や骨粗鬆症など広範な病気を扱います。私は、膝関節を専門としていますが、中でも変形性膝関節症の発生頻度は非常に高く、国内での患者数は800万人にのぼると言われています。今後の抱負は、小さな傷でほとんど筋肉を切らずに行う最小侵襲手術を推進していきたいと考えています。最小侵襲手術は術後の痛みを軽減し、入院期間の短縮が可能です。そのためには高度な手術手技を身につけた優れた臨床医を育成する必要があります。また、私の研究領域である生体工学は、医学部と工学部の連携が不可欠です。すでに愛媛医工連携セミナーを立ち上げており、共同研究体制を確立したいと考えています。

もちろん、地域医療機関と密接な連携も必要ですし、高校野球や愛媛マラソン、愛媛FCなどの地域スポーツ分野での医療支援活動もこれまで以上に積極的に取り組みます。

**PROFILE**

みうらひろまさ◎1982年九州大学医学部卒業、医学博士。九州大学医学部附属病院、国立別府病院、九州大学医学部准教授などを経て、2010年から同職。

PETセンター

## PETによる、がんの早期発見と病院の治療レベルの向上を

放射線部部長　PETセンター長　**望月輝一**　医師

PET（陽電子放射断層装置）とは、がん細胞が大量のブドウ糖を取り込むという性質を利用し、ブドウ糖の代謝が活発な箇所を画像上で分かるようにする最先端のがん検査機器です。現在、国内の多くの医療機関で導入が進められており、がんの治療の戦略を立てる上で、なくてはならないものです。

今回、当院に導入されたPET/CTは、県内では最も新しい機種で、従来より更に精度の高い検査結果を得られるようになりました。ただ、器機だけが高度になっても、求められる結果は得られません。PETの高度化に伴って、その診断には豊富な経験が必要となります。当センターでは、日本核医学会より認定を受けた専門医が診断にあたり、より早く、より精度の高い診断を行うことができます。PETは、がん治療の方針を決定する上で非常に役立ちます。がんの進行状態を把握した上で治療の戦略を立てることができますし、治療経過の観察にも有効です。人間ドックでの利用も始まっており、がん細胞の有無を全身くまなく検査することが可能です。

PET利用が増えれば、当院全体のがん治療のレベルは必ず向上します。機会ある毎にPETの素晴らしい点について説明し、がんの早期発見やがん治療に役立ててもらえるよう動いていきたいと考えています。

**PROFILE**
もちづきてるひと◎1980年愛媛大学医学部医学科卒業。世界に先駆けて新しい解析方法を考案し、その評価を行うなど放射線科専門医として活躍する。たまの休日は、ロードタイプの自転車でサイクリング。

呼吸器センター

## メンバーの協力と工夫で、世界最先端の治療を

呼吸器センター長　**佐野由文**　医師

現在、呼吸器疾患も多岐にわたり、40～50年経って症状が出る肺の病気も増えました。そのため、本院では呼吸器センターを4月に新設し、新しい形での診療体制をスタートさせました。ここでは、診療科の垣根を越え、呼吸器各分野のエキスパートの医師（呼吸器外科3名、呼吸器内科2名）が呼吸器に関する疾患を組織的に診る体制をとっています。それぞれの得意分野を生かし、診断の段階から知恵を出し合い、最善の治療を探っていきます。カンファレンスでは、放射線治療や心臓外科の専門医なども加わり、各専門医の立場や視点に立って意見を述べ、それを総合して、患者さんにとってのベストな治療方法を選択していきます。

私が常に目標としているのは、どんな疾患であろうと、患者さんにとって日本中で最高の医療が受けられる場所であるべきということです。病状や年齢などの理由のために手を施せないとされていた患者さんを、治療方法の工夫と医師団の協力により、1人でも多く助けること、またそれによって、さらにノウハウが増え、スキルが上がり、我々でないとできないことを成し遂げていきたいと考えています。

**PROFILE**
さのよしふみ◎1985年山口大学医学部卒業、医学博士。岡山大学医学部附属病院講師、独立行政法人国立病院機構岩国医療センター胸部外科部長などを経て、2010年から同職。趣味はフットサルと音楽鑑賞。

## 介護者支援ボランティア

本院では「国立大学法人愛媛大学と東温市との連携に関する協定書」に基づき、6ヶ月の準備期間を経て、22年度から介護者支援ボランティア活動を開始しました。

東温市、東温市老人クラブ連合会会員及び愛媛大学医学部附属病院のボランティア登録スタッフ（21名）が連携して、介護者の要請により、外出時のご家族の見守り、話し相手、健康相談等の活動に当たっています。1回当たりの活動時間は約2時間程度ですが、登録スタッフは特別休暇の承認を得て勤務に支障のない範囲で活動しています。東温市では65才以上が人口の23.6%（21年9月現在）と高齢化が進んでいますが、高齢者も安心して暮らせる東温市をめざす上での新たな取り組みに、地元からは今後の活躍が大いに期待されています。

## 編集後記

猛暑の中、皆さんお元気ですか。愛媛大学病院は最新鋭設備を備えた3号館を竣工しました。3号館では小児総合医療センター、手術部の拡充エリアに加えて、臨床薬理センターと抗加齢・予防医学センターが設置され、既に稼働を始めています。また新たにPETセンター、呼吸器センターもスタートしました。私達の願いは患者さんから愛され頼られる病院を作り上げることです（週刊ダイヤモンド誌の“たよれる病院ランキング”で本院が四国第一位の評価を得ました）。

◎愛媛大学医学部附属病院広報委員会
委員長　檜垣實男

◎表紙の人
臨床薬理センターのスタッフ
── 3号館の前にて ──

愛媛大学医学部附属病院
〒791-0295 愛媛県東温市志津川　Tel.089-964-5111（代）
ホームページ http://www.hsp.ehime-u.ac.jp/